

氏名(本籍) ^{は が のり お} 芳賀紀雄(茨城県)
 学位の種類 博士(文学)
 学位記番号 博乙第2012号
 学位授与年月日 平成16年3月25日
 学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当
 審査研究科 人文社会科学研究科
 学位論文題目 萬葉集における中国文学の受容

主査	筑波大学教授		犬井善壽
副査	筑波大学教授		石埜敬子
副査	筑波大学教授		稲垣泰一
副査	筑波大学教授	博士(文学)	松本肇
副査	筑波大学教授		向嶋成美
副査	筑波大学教授	文学博士	伊藤益

論文の内容の要旨

本論文は、わが国の文物における中国文物の摂取と受容、そしてその受容が平安期において展開することになる文化の様相を、『万葉集』における中国文学の受容と変容の中に捉えるものであり、そこから平安期における展開までを見通そうとするものである。

本論文は、以下の5部32論考から成っている。

萬葉集と中国文学

- I 萬葉集における中国文学の受容 (9論考。内、1論考は19項目から成る)
- II 大伴旅人と山上憶良 (12論考)
- III 大伴家持 (9論考)

天平萬葉の流れ

巻頭論文「萬葉集と中国文学」は、本論文の緒言であり、著者の研究姿勢を示すものである。まず、わが国の上代人の教養を論じてその中国典籍の利用を指摘し、漢詩文を訓読して詩語からわが国の和歌において歌語として摂取する方向を『万葉集』に見、特に詠物詩の影響のもと詩的表現を獲得した、と大きな展望を行う。これが以下に展開される本論文の各論考における著者の『万葉集』所載歌の分析の基本的姿勢である、と宣言する。

第I部の冒頭に収められた「引証と訓釈－記紀の人物評語を中心に」は、本論文における「受容」の概念規定の論である。即ち、「受容」とは作者が特別の意識を以て一つの典拠を選び取り、それを自らの表現とすることまでをいうと規定し、本論文における検討は、当面の表現と示された典拠とを作者の側に即して読み直し、是非を確かめる作業であるとする。以下、「毛詩と訓釈－記紀の人物評語を中心に」に始まり「懐風藻」に至る8編の論考と都合19項目から成る「典籍受容の諸問題」の論考において、『毛詩』『漢書』『杜甫詩』その他の多くの中国詩文に見られる表現の、『万葉集』に止まらず『懐風藻』や残存するわが国の願

文の類に至るまでの文物について、先の意味での受容を論証する。特に「典籍受容の諸問題」の19項目の論考において、前掲の中国詩文の他、「漢魏六朝詩」「初唐詩」「詠物詩」「楚辞」「文選」「玉台新詠」「經書」「初学書」「家訓」「老子」「莊子」「史書」「小説」「遊仙窟」から、敦煌文書、吐魯番出土文書、仏典、また、彼の地における暦や年中行事に至るまでを典拠の対象として、わが国の文物、特に『万葉集』をはじめとする文学作品におけるその受容を細大漏らさず検討する。本論文の題目とした「万葉集における中国文学の受容」という題のもとに纏められたこの部の9編の論考は、その題のとおり、本論文の中心をなす具体的論証の論考群である。

「Ⅱ 大伴旅人と山上憶良」に収められた12編の論考においては、『万葉集』所載の、太宰帥に赴任した大伴旅人と、同じ頃に筑紫守として赴任していた山上憶良との間の歌の交流を、両人の歌の表現、殊に『懐風藻』をはじめとするわが国の漢詩・漢文および中国における詩文表記等の影響・受容の観点を含せて考察する。例えば、「故郷」「望郷」等の字句の彼我の使用例の吟味と作品における意味あいの検討から大伴旅人を望郷の歌人と位置付け、「山齋」の語の使用を分析してそこに見られる神仙思想や仏教の影響と受容の点までも指摘する、などである。以て、本論文の『万葉集』における中国文学の受容という中心課題に応じた、『万葉集』所載歌の表現研究とする。

「Ⅲ 大伴家持」は、『万葉集』所載の大伴家持詠作歌の作品研究である。まず、家持の初期作品が中国六朝時代以後に盛行する「詠物詩」の影響の大きいことを細部にわたって検証し、次いで、家持が後年の越中国主時代に大伴地主と交した贈答歌の読解と表現分析を行い、両人が柿本人麻呂以来の歌の伝統を継承しつつ、加えて、中国の詩文の表現を導入し、和歌の伝統を克服したと論じ、その証左を、両人の間に交された長歌等を「賦」と称する事実に見る。この部は、大伴家持歌の作品研究であると同時に、『万葉集』における中国文学受容の史的展開をたどる、文学史的研究になっている。

最巻末に配された「天平萬葉の流れ」の論は、本論文の纏めとして、笠金村、山部赤人、大伴旅人、山上憶良、高橋虫麻呂等、天平時代に至る間の歌人の詠歌を『万葉集』後期までたどり、『万葉集』撰集に最も有力な撰者として働いたと考えられている大伴家持の歌における中国詩文の撰取に『万葉集』の中国文学受容の到達点を認める。併せて、『万葉集』から平安時代の『古今和歌集』への流れにおける中国文学の受容に関する展望を付して、結びとする。

審 査 の 結 果 の 要 旨

わが国の上代における文物は、文学に限らず、政治経済における公私文書、個人における書簡、また、絵画その他の美術や彫刻等の芸術、陶芸品や仏具法具等の芸術性を備え持つ器物、舞踏や唱歌等の音楽芸術、また天文・土木・築城・建築等に至るまで、中国において開化発展した文化を撰取し、それを発展的に展開させる方向に進んだものである。それ等が、平安時代以降、更なる進展を遂げ、わが国独自の文物へと展開するようになる。その、中国文物のわが国への影響、わが国の側からいえば受容は、多岐にわたり、かつ長期間にわたることであり、従って、その資料は膨大である。加えて、彼の地においても、わが国へ渡来の後も、その文物は少なからず変容を来たしていると考えざるをえない。

本論文では、さような複雑な資料条件下にあるにも関わらず、中国文物を可能なかぎり細大漏らさず博搜し、逐一その影響関係の可能性の有無を吟味した上で、『万葉集』をはじめわが国の文献における受容について指摘し、特に『万葉集』の歌について、受容に止まらずその発展的展開にいたるまで熟考を加え、論理的にその受容関係を吟味している。また、論理的な推理の及ばない件については、広く承認される経験則に沿って推理を試み、妥当な結論を提出している。いわゆる比較研究ではなく、「受容」とその「変容」の検討である。本論文によって初めて中国文学の受容が明かになった『万葉集』その他における字句表現は枚挙

に違がない。以上を併せて、『万葉集』所載歌の的確な読解と分析と批評が行われている。

本論文に、注文を付すとすれば、『万葉集』における有力歌人柿本人麻呂の歌についての考察がほしい。本論文においても、日並皇子挽歌等の殯宮挽歌における『文心雕龍』の影響を見るなどの言及があり、人麻呂における中国文学の受容に関する著者の研究は進んでいると見受けられるだけに、余計その感を深くする。人麻呂論を置いた上で旅人、憶良、家持を論じることで、本論文において主張される、詩語から歌語へという『万葉集』における中国文学の受容の課題が、平安期の文学における同じ中国文学の受容の問題とも合さって、より確たる文学史を構築することになろう。いま一つ、本論文にいう「表現」とは、中国文学の受容という課題に即して、「字句表現」の意が大きい。和歌における「表現」とは素材・題材・修辞・字句表現・主題の総合を言うのであり、中国文学に見える「素材」を『万葉集』歌人が摂取・受容して「題材」として自己の詠歌の「字句表現」とし、以てその歌の「表現」を確立して行く、という術語の確たる規定がなされて然るべきであった。尤も、かような術語に関する規定の少々不足は本論文の瑕瑾に過ぎず、しかも、著者の一々の和歌についての表現分析は概ね如上の概念に沿ったのものであると見受けられることも、また、確かなのではあるが。

本論文において明かにされた、『万葉集』はじめわが国上代の文物における中国文学の受容の指摘と変容の解明とは、今後の『万葉集』の研究に、更にいえば、日本文学の研究に、寄与するところ極めて大であることは言を俟たない。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。